

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Sobre el modo verbal regido por aunque (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1998-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福嶋, 教隆, Fukushima, Noritaka メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1690

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



aunque 節中の叙法について(1)

福 寫 教 隆

1. 緒 言

イスパニア語の接続詞 *aunque* は、譲歩の副詞節を導くことができる。その節（以下これを *aunque* 節と呼ぶ）内の動詞の叙法対立は、しばしば次のように説明される。

- (1) 動詞は、現実に行っていること、確認できることを述べる時は直説法を、未来のこと、確認できないこと、仮定的なことを述べる時は接続法を用いるのを原則とする。

Voy aunque llueve.

（現に）雨が降っているけれども私は行きます。

Iré aunque llueva.

たとえ雨が降っても私は行きます。（桑名・他・編，1990：214）

- (2) 仮言的なときは接続法で用いるが、事実ならば直説法で用いる。

Irá aunque tiene fiebre.

彼は熱があるけれど行くだらう。

Irá aunque tenga fiebre.

彼は熱があっても行くだらう。（高橋，1993：120～121）

* 本稿は上智軽井沢セミナーハウスにて開催された SELE 98（第18回日本スペイン語学セミナー）にて1998年8月28日に行った口頭発表に加筆したものです。貴重なご助言を下された参加者各位、コーパスを使用させて頂いた上田博人さん、文献をご紹介下さった川上茂信さんに厚く御礼申し上げます。

(3) (...) aunque の節では直説法が使用される場合と接続法が使用される場合とでは意味が相違する。(...)

Aunque llueve, voy de pesca al río.

雨が降っているけれども、私は川に釣りに行く。

Aunque llueva, voy de pesca al río.

たとえ雨が降っていても、私は川に釣りに行く。

上記の文で直説法の譲歩節（前の文）は事実を述べているのに対し、接続法の場合（後の文）は述べられていることが事実であるかどうかは断定が保留されていて明らかではない。 (寺崎, 1998 : 194)

このように、*aunque* 節では直説法と接続法という形式の差が、「事実」か「仮定」かという意味的違いに対応していて、しばしば上にあげたような最小対立を成す、と説かれることが多い。だが問題はそう単純ではない。現実には *aunque* 節中の叙法選択には、上の図式では説明の困難な事例も存在する。本稿ではそういった事例に注目し、どうすれば *aunque* 節内の叙法についての妥当な記述ができるかを考察してみたい。

なお *aunque* 節については、それが従属節（譲歩）なのか等位節（逆接）なのかという観点から論じられることがあるが、これは直説法をとる場合の問題であり、本稿の論点には大きな係わりを持たないので、主たる考察の対象とはしない。⁽¹⁾

2. 接続法をとる *aunque* 節と「事実」

次のような事例では、*aunque* 節に接続法が用いられているが、その内容が事実であることが文脈から明らかである。

(1) この問題は Rens (1977) や Lázaro Mora (1982) が詳しく論じている。また Bosque (1984) の指摘も興味深い。

- (4) —Me sale el usted. Papá, que en paz descanse, decía que tratar a los padres de tú era una falta de respeto.
—¡Pero si tú a mí no me tienes ningún respeto, aunque me **trates** de usted! (Carmen Martín Gaité, *Caperucita en Manhattan*, Siruela, Madrid, 1990, p.58)
- (5) Era buena, aunque **gritara** demasiado y **dijera** que no comprendía aquella colección de vidrios y papeles pegada a la pared. “¡Cuánta basura!”, decía. (Ana María Matute, *El tiempo*, 1963, Destino, Barcelona, 1966, p.150)
- (6) Y el Moñigo tampoco era cualquier cosa, aunque **contase** dos años más que él y aún no **hubiera empezado** el Bachillerato. (Miguel Delibes, *El camino*, Destino, Barcelona, 1950, p.9)

まず(4)の返答の文は、「いくら言葉遣いが丁寧でも、お前は腹の中では私を軽蔑している」という内容だが、これは聞き手が話し手を usted という敬称で呼んでいるという事実を踏まえたものである。(5)では、「彼女は『ごみだらけじゃないの!』と言っていた。」という後続文によって、*aunque* 節の内容が事実であることが明らかである。この文は、「彼女はいい人だったが、声がやたら大きい上に、壁に貼ってあるガラスや紙くずのコレクションが理解できないと言った。」とでも和訳できよう。更に(6)の「馬糞」とあだなされる少年が「彼」より2歳年上であること、まだ中学校に行っていないことは、単なる仮定ではない。そういう負の要因が事実であってこそ、「その少年を侮ってはならない」という趣旨が生きてくる。

また文法家のあげる作例としては、たとえば次のようなものがある。

- (7) Lo deshereda, aunque {a. *es* / b. **sea**} su hijo. (Vallejo, 1922: 50)

(8) Aunque {a. soy / b. sea} español, no me gustan los toros.
(Fernández Alvarez, 1984: 59)

(9) Aunque {a. tengo / b. tenga} veinte años no sé inglés. (Sastre,
1997: 212)

(7)は「彼は自分の息子に財産を相続させない」、(8)は「私はスペイン人なのに闘牛が嫌いだ」、(9)は「私は20歳にもなるのに英語ができない」という文意である。主語に当る「彼」や「私」が、自分と息子の関係や、自分の国籍、年齢を知らないという特殊な状況を念頭に置かない限り、*aunque*節の内容が真であることは明らかである⁽²⁾。にもかかわらずいずれの叙法も許され、Fernández Alvarezによれば(8)ではむしろ接続法が好まれる傾向が顕著であるという⁽³⁾。

*aunque*は、かつては専ら接続法を要求したことを考慮すれば、いま述べたような用例の素因を、通時的なもののみならずことも可能であろう⁽⁴⁾。しかし仮にそうだとすると、古い用法の名残が現代語の中に恣意的に表出したものだと結論づける前に、それらが共時的体系の中で何らかの原理にのっとって使用されているのではないかと考え、その可能性を検討してみるべきだろう。

3. 先行研究

接続法の*aunque*節が事実を表す用法については、いろいろな文法書、論

- (2) 後述する Trujillo (1996) は、この問題を論じるに当って、例文(7)を *Lo desheredo aunque {a. es / b. sea} mi hijo.* と改め、仮定的な解釈の可能性を一層減じている。
- (3) 筆者が母語話者3名(スペイン人男女各1名、ボリビア人女性1名)に確認したところ、全員が(7)~(9)のいずれでも両叙法が使えると回答した。なお、細部においては判断が異なっていた。スペイン人男性:「強いて選ぶなら(7)は直説法が良い。(8)、(9)はどちらも差異がない。」同女性:「あえて選ぶならば(7)は接続法、(8)、(9)には直説法が良い。」ボリビア人女性:「(7)は現実のことだから *es* が正しいのだろうが、*sea* でも抵抗ない。(8)、(9)は接続法の方が好ましいように思う。」
- (4) Cuervo (1886¹, 1994²: I, 787) は *La primera hubo de ser la construcción con subj., como en francés é italiano.* と述べている。また Pottier (1970: 190~191) は Cuervo 説を引き、13~14世紀の文献では、*aunque*節は専ら接続法をとると述べつつも、13世紀の Gonzalo de Berceo の作品中に直説法の事例があることを指摘して、性急な結論を出すことを戒めている。

文、辞書が言及している。その説明は大きく分けて、①「同節は前提となる副情報を表す」とするもの、②「同節は話し手と聞き手の間の意見対立を示す」とするもの、③「同用法は特殊なもののみならずに当らない」とするもの、④その他、の4種あると考えられる。

3. 1. 第1の見地をとる研究者には、Vallejo (1922), Manteca Alonso-Cortés (1981), Borrego 他 (1985), Sarmiento他 (1989), Lunn (1989), Haverkate (1991), Moya Corral (1996), Gutiérrez他 (1996), Hickey (1998) などがいる。

Vallejo (1922) は、先述の例文(7)などをあげ、ここでの接続法は「ある事実を別の新たな事実と対立させて呈示するのではなく、既知の事実であることを踏まえた上で、無効とみなして排除する」(no se trata de oponer a una realidad otra nueva realidad, sino que dando por conocida esta segunda realidad la desecha como ineficaz) (p.50) と述べている。接続法が既知情報を表すという考えを、極めて早い時期に明言した論考として注目に値する。⁽⁵⁾

Manteca Alonso-Cortés (1981) はこれを継承し、「従属節の内容が事実であるとの前提があり、話し手はそれを(主節の内容の成立に)無関与であると判断する」(la presuposición cierta del hablante acerca de la realidad de la proposición subordinada, es vista por el hablante como irrelevante) (p.78) と、新術語によって換言している。

Borrego 他 (1985) は、ごく端的に「話し手は内容が事実であることを知っている。話し手は聞き手もその事実を知っているとの前提に立っている。aunque 節には主たる情報はない」(El hablante conoce el hecho. El

(5) 先述の Lázaro Mora (1982) は、この問題に関しては Vallejo 説に全面的に賛同の意を表している。("El uso del subjuntivo en las proposiciones concesivas fue perfectamente explicado por José Vallejo, y a sus trabajos remitimos." (p.124))

hablante presupone que el oyente también lo conoce. Se proporciona información sólo en la principal.) (p.169) と記述している。

Sarmiento 他 (1989) は「*aunque*以下で表された内容を話者が前提と捉え、その上で何らかの主張をする場合、つまり、話者にとって *aunque* 以下で表されている節について現実かそうでないかは関心のない場合に用いられる」(Lobo 他・訳, p.220) と主張する。

Lunn (1989) は関連性理論に立ち、接続法を用いた *aunque* 節は「その情報が重要でないこと」(unimportance of information) を表すことができると述べている。(p.256)

Moya Corral (1996) も同じ理論を採り、「主節の表すできごとの生起にとって、*aunque* 節の内容が強い不都合 (inconveniente fuerte) となる場合は、同節に直説法が用いられ、弱い不都合 (inconveniente débil) となる場合は、接続法が使われる」(p.166) と説く。即ち「事実であっても、談話の本題との関連性の低い事項は、接続法で表す」とみなすわけである。

Gutiérrez 他 (1996) が編纂した辞書の *aunque* の項目には、「情報が既知のものである時、直説法・接続法が用いられる」(Se usa el indicativo o subjuntivo cuando la información es ya sabida.) という記載がある。(p.155) ただし、その直後に「感情的に強く抗弁する時や、命令的な主張に承服しかねることを示す時は、通例、接続法が用いられる」(En contextos de réplica emotiva y enfática y de desentendimiento ante un argumento impositivo, suele usarse el subjuntivo.) という記載も設けられているので、この辞書は第1の見地だけでなく、以下で紹介する第2の見地をも採り入れていることになる。

なお Haverkate (1991) と Hickey (1998) は、各々、丁寧表現と「うそのように思えるかも知れないが (*aunque parezca mentira*)」という表現を論じるにあたって、第1の見地を踏まえている。

3. 2. 一方、「接続法をとる *aunque* 節は、話し手と聞き手の間の意見対立を示す」と説く研究者には、Galimberti 他 (1994), Gutiérrez 他 (1996), Porto Dapena (1991), Butt 他 (1994), Sastre (1997) などがある。

Galimberti 他 (1994) の辞書には、*aunque* の項で「異論への返答に接続法を用いる」(respondiendo a una objeción [+subjuntivo]) (p.76) という説明がある。Gutiérrez 他 (1996) の辞書にも、先述の通り、同類の記載が見られる。これらの説明には、次のような例文が付されている。

(10) Aunque a ti no te **guste**, es muy bonito. (Galimberti 他, 1994: 76)

(11) Aunque **sea** Nochebuena, tenemos que arrestarlo. (Gutiérrez 他, 1996: 155)

また Butt 他 (1994) は、「予期に反した否定を行う場合には通例、接続法が用いられる」(A subjunctive is normally used after *aunque* when something expected is in fact denied.) (p.265) と述べ、例として上述の (8b) をあげている。

Sastre (1997) は、第1節にあげた (9) のような文では、直説法と接続法の機能対立が「中和」(neutralización) しているが見つつも、「接続法が現れる場合は対立や反論の様相が鮮明に出る」(Cuando aparece el subjuntivo el contraste, la objeción, queda más acentuada.) (p.212) と断っている。

なお Porto Dapena (1991) は、次に紹介する第3説に続いて、「話し手の返答が相手の意見に対する拒絶である場合」(en las réplicas, en cuyo caso expresa inhibición del hablante en cuanto a la aceptación de algo dicho por el oyente) (pp.233~234) にも、しばしば接続法が使われると説いている。

3. 3. 中には、本稿で取り上げている用法を何ら特殊なものとは見なさず、一般的な原則で説明可能と見る立場もある。Togebly (1953), Fernández Alvarez (1984), Porto Dapena (1991), Trujillo (1996) などの説をここに含めることができる。

Togebly (1953) は、直説法を「断定」(affirmation) の叙法、接続法を「断定の中断」(suspension de l'affirmation) の叙法と規定する (p.118) が、事実を表す *aunque* 節が接続法をとる事例もこの中に入れている。即ち *aunque* 節では「実際に起こった出来事を述べる時に、接続法が現れることも多い」(Le subjonctif apparaît très souvent en parlant de faits qui ont réellement lieu.) (p.15) が、これは「仮定や疑惑を表すのではなく、内容が事実であるか否かについての断定を中断しているのである」(Le subjonctif n'exprime ni la supposition ni le doute, mais seulement la suspension de l'affirmation, que le fait soit réel ou non.) (pp.15~16) と説く。この説明は、他の章での主張から推して、「当該の *aunque* 節は、文の中心的情報を伝える部分ではない」という趣旨だと解釈すれば、第1説の一種だとみなすこともできる。

Fernández Alvarez (1984) は、Bulls (1965) 説に賛同し、「経験」(experience) のある事柄は直説法で、ない事柄は接続法で表すという原則に立ち、当該の用法もこれを拡張して説明する。即ち *aunque* 節では「話し手が事行に関して個人的経験を持たぬ時、接続法を使う。また、たとえ経験があっても、事行を疑わしく、非経験的なこととして呈示したいと考える場合も同様である」(El subjuntivo se usa cuando el hablante no tiene experiencia personal de la acción, o aunque la tenga, le interesa, le conviene o simplemente prefiere presentarla como dudosa y, en consecuencia, como no experimentada.) (p.59) と主張する。たとえば、直説法 (12a) を用いると、あまりにも断定的に響き、聞き手の心証を害する恐れのある場合に、故意に接続法 (12b) を使うというのである。さらに、

先述の(8)のような事例は、この用法の「拡張」(extensión)であるが、叙法対立の薄れた中和現象であるとも述べている。(pp.59~60)

(12) Aunque {a. *estás* / b. *estés*} gordo, te quiero. (Fernández Alvarez, 1984: 59)

Porto Dapena (1991) は、たとえ事実であっても「聞き手の気持ちを傷つけない」(no herir la susceptibilidad del oyente)、或は次の(13)の場合のように、「謙遜」(una actitud de modestia)、またはプライバシーを明かしたくない、といった動機によって、接続法が用いられることがあると言う。(p.233)

(13) Aunque **tenga** dinero, no pienso darte ni un céntimo. (Porto Dapena, 1991: 233)

また Trujillo (1996) は、直説法を事象を「個別化」(particularización)して表す形態、接続法を事象を「一般化」(generalización)して表す形態と捉える。注(2)に示した例文 Lo desheredo aunque sea mi hijo. で接続法が用いられるが、これは、「ある人物に遺産を与えない」行為にとって「その人物が他ならぬ我が子である」ことは、「単なる個別の障壁ではなく、普遍的な意味を持つ法則から生じる、回避しがたい障害である」(No se trata de una mera dificultad concreta, sino de un obstáculo que se presenta con la fuerza de una ley de validez universal, y, por tanto, inevitable o muy difícil de soslayar.) (p.39) 点に起因すると説明する。

Trujillo は、上述の Vallejo (1922) や Manteca Alonso-Cortés (1981) の説には反対の立場をとることを明言し、問題の aunque 節は、決して主節の内容の成立に「無関与」(irrelevante)な、或は「無効とみなして排除さ

れる」(se desecha como ineficaz) ような対象ではなく、逆に極めて重要な内容であるからこそ、接続法で表されているのだと主張する。

3. 4. 問題の用法に関する、その他の言及として Bello (1847) と Cuervo (1886) に触れておこう。Bello (1847) は、次の (14) のような文では実際に起こった出来事を表している場合でも、接続法の方が好ましいと言う。しかし残念なことに「事例ごとに生じる叙法形態の固有の意味は、説明するより感じとる方がた易い」(Es más fácil sentir que explicar el valor peculiar de las formas modales según los diferentes casos.) (§ 1221) と述べるにとどまり、問題には立ち入っていない。

(14) Bien pudiste venir, aunque **lloviese**. (Bello, 1847: § 1221)

Cuervo (1886) は、「接続法を用いると意味が強調される。それは次の例の接続法を直説法に改めてみると容易に分かる」(En este caso tiene una fuerza ponderativa que se percibe fácilmente cambiando en los siguientes ejemplos el subjuntivo en indicativo.) (I, p.785) と説き、(15)などをあげている。先述の Trujillo (1996) の「重要な内容であればこそ接続法を用いる」という主張と一脈通じるところがある。

(15) Luego si vos / Obráis afrentosos hechos, / Aunque **seáis** hijo mío, / Dejáis de ser caballero. (Juan Ruiz de Alarcón, *La verdad sospechosa*. Cuervo, 1886: I, p.785)

3. 5. 本稿の主題となる事例について、4種の説明が存在することを見た。これらのうち、どれが事象を最も適切に捉えているだろうか。或はこれ以外の新たな仮説を追究する必要があるのだろうか。

第4の「その他」の説は、ごく早期の、また印象論的な指摘であるから、これを除外し、第3説、第2説、第1説の順で、各々の優劣を論ずることにしよう。

もし第3説が示すように、当該の用法は特殊なもののみならず、一般的な叙法規則から導けるのであれば、無用な細則を設けることなく問題を処理することができるという、大きな利点がある。逆にこの説を維持する際の難点は、本来、有標的である可能性の高い用法を大原則の中になんとか収めることに固執するあまり、原則の過度の拡大適用を許し、その有効性を損ないかねないということである。

Trujillo (1996) の主張には、ややもするとこの難点が露呈しているように見える。さらに第1説についての誤解があるのではないと思われる。即ち、接続法をとる *aunque* 節が副次的情報を担うという捉え方は、その内容を転んじるという価値判断とは無縁であるのに、あたかもこれらを等価とみなして非難している面が認められる。

一方、Togebly (1953) の説明は、一見漠然としているが、第3説を第1説と結ぶかけ橋的存在と見れば有用である。

Fernández Alvarez (1984) や Porto Dapena (1991) は、例(12)や(13)のように、語用論的動機から事実を接続法で述べて断定を和らげる場合があることを指摘している。これは確かに叙法の一般的な原則の拡張と見ることができよう。しかし、ここから(8)、或は(1)～(3)のような事例へは、多少飛躍があるように思われる。(8)の話し手が自分がスペイン人であると断言しても、聞き手の心証を害する恐れもないし、隠すべきプライバシーを暴露したとも考えにくい。この文に見られる用法を Fernández Alvarez が必ずしも「拡張」用法に限定せず、「叙法対立の薄れた中和現象」とも見たのは、その点への留意があったからではないだろうか。

以上、第3説を考察した結果、①この説は語用論的理由による接続法の拡張用法には適用可能だが、その圏外にまで適用するには無理があること、②

Togebly (1953) 説が考慮に値すること、の2点が明らかになった。

続いて第2説、即ち、当該の構文が「話し手と聞き手の意見対立」を示すという説明の検討に移ろう。相手に反論・抗弁するには、まず相手の意見が明らかにされていなければならない。従ってこの用法は、第1説に言う「既知情報」を表す用法の1種と考えることができる。

第2説は、辞書・概説書といった実用性を重んじる文献によって支持される。またこの説が紹介される場合は、Gutiérrez 他 (1996) のように第1説と、或は Porto Dapena (1991) のように第3説と併置されることがある。即ちこの説の提唱者は、「話し手と聞き手の意見対立」を当該の構文の唯一的基本機能とみなす訳ではなく、頻度が高く記述に値する運用事例として捉えていると思われる。⁽⁶⁾

以上、第2説を顧みたら結果、実用ではなく理論面では、この説を第1説に含めても差し支えないと言えることが分かった。

最後に「事実を表す接続法の *aunque* 節は、前提となる副情報を表す」という第1説を考察しよう。この説には賛同者が多い。Vallejo (1922) の行った直感的観察が、かつては生成意味論、最近では関連性理論といった装いをし、整備されつつ今日に至っている。第2説の提唱者や第3説の Togebly (1953) まで含めると、少なくとも研究者の数の上では定説といってもいいのではないと思われる。また Trujillo (1996) による第1説批判には問題があることは、既に触れた通りである。

さらに第1説には、*aunque* 説だけでなく、感情の述語に導かれる名詞節や *el hecho de que*, *de ahí que* の節における接続法にも適用できるという利点もある。⁽⁷⁾

しかし既存の説明で十全かと言えば、決してそうではない。第1説を念頭

(6) なお Sastre (1997) や Fernández Alvarez (1984) が用いる「中和」の概念は、接続法が事実を表す用法に安易に冠することによって、問題を等閑視してしまう危険があるので、濫用は慎むべきであろう。

(7) 拙稿 (1990, 1993) 参照。

に置いて実例(1)～(3)に接すると、確かに aunque 節の表す情報の比重は軽くて、主節の方には情報の力点がかかっているように受け取れる。しかしこれは、ともすると事例を前にして結果論的に説明を与えるだけのテキスト注解に陥りかねない。当該の従属節が「前提となる副情報を表す」ことを明示的な方法で論証することは不可能だろうか。

また、実際の言語使用では、語用論的理由による接続法の拡張用法と、そうでない用法との比率は、どのようなものだろうか。もし前者が圧倒的に多く後者は稀な用例だというのであれば、適用範囲の限られた第1説よりも、むしろ第3説の方が有用だという見方も可能である。

以上、3つの説を比較した結果、第1説がもっとも有力だが、問題がない訳ではないことが指摘された。次節では、これを踏まえて収集事例を分析する。資料には上田(1984～97)を利用する。

(以上次稿)

引用文献

- Bello, Andrés (1847) *Gramática de la lengua castellana*. (1970) Sopena Argentina, Buenos Aires.
- Borrego, Julio 他 (1985) *El subjuntivo*, Sociedad General Española de Librería, Madrid.
- Bosque, Ignacio (1984) “Negación y elipsis”, *Estudios Lingüísticos* 2, Univ. de Alicante.
- Bull, William E. (1965) *Spanish for teachers*, Ronald, New York.
- Butt, John 他 (1988, 1994²) *A new reference grammar of modern Spanish*, E. Arnold, London.
- Cuervo, Rufino José (1886¹, 1994²) *Diccionario de construcción y régimen de la lengua castellana*, Instituto Caro y Cuervo, Santafé de Bogotá.
- Fernández Alvarez, Jesús (1984) *El subjuntivo*, Edi-6, Madrid.
- Galimberti Jarman, Beatriz 他・編 (1994) *The Oxford Spanish dictionary*, Oxford Univ. Press.
- Gutiérrez Cuadrado, Juan 他・編 (1996) *Diccionario Salamanca de la lengua española*, Santillana, Madrid / Univ. de Salamanca.

- Haverkate, Henk (1991) “¿Cómo aseverar cortésmente?”, *Foro Hispánico* 2, Rodopi, Amsterdam.
- Hickey, Leo (1998) “《Aunque parezca mentira》: signal, control or constraint?”, *Bulletin of Hispanic Studies* 75-3, Univ. of Glasgow.
- 桑名一博・他・編 (1990) 『西和中辞典』, 小学館。
- Lázaro Mora, Fernando A. (1982) “Sobre 《aunque》 adversativo”, *Lingüística Española Actual* 4-1, Instituto de Cooperación Iberoamericana, Madrid.
- Lunn, Patricia (1989) “The Spanish subjunctive and ‘relevance’”, *Studies in Romance linguistics* (Carl Kirschner 他・編), John Benjamins, Amsterdam.
- Manteca Alonso-Cortés, Angel (1981) *Gramática del subjuntivo*, Cátedra, Madrid.
- Moya Corral, Juan Antonio (1996) “Valor modal del llamado 《subjuntivo concesivo polémico》”, *Lingüística Española Actual* 18-2, Arco, Madrid.
- Porto Dapena, José Alvaro (1991) *Del indicativo al subjuntivo*, Arco, Madrid.
- Pottier, Bernard (1970) *Lingüística moderna y filología hispánica*, Gredos, Madrid.
- Rens, Margarita Van (1977) “Acerca de la oración concesiva encabezada por *aunque*”, *Español Actual* 32, Oficina Internacional de Información y Observación del Español, Madrid. / *Boletín de la Academia Puertorriqueña de la Lengua Española* 5-2, San Juan.
- Sarmiento, Ramón 他 (1989) *Gramática básica del español*, Sociedad General Española de Librería, Madrid. Félix Lobo 他・訳 (1998) 『スペイン語基礎文法』, プレンティスホール出版。
- Sastre, María Angeles (1997) *El subjuntivo español*, Colegio de España, Salamanca.
- 高橋覚二 (1993) 『テーブル式基礎スペイン語便覧』, 評論社。
- 寺崎英樹 (1998) 『スペイン語文法の構造』, 大学書林。
- Togebly, Knud (1953) *Mode, aspect et temps en espagnol*, Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab, København.
- Trujillo, Ramón (1996) “Sobre el uso metafórico de los modos en español”, *El verbo español* (Gerd Wotjak 編), Vervuert, Frankfurt.
- 上田博人 (1984~97) *Análisis lingüístico de obras teatrales españolas*, 12 卷, 東京外国語大学(第1~3卷), 東京大学(第4~12卷)。

Vallejo, José (1922) “Notas sobre la expresión concesiva”, *Revista de Filología Española* 9, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, Madrid.

Veiga, Alexandre(1991) *Condicionales, concesivas y modo verbal en español*, Univ. Santiago de Compostela.

拙稿 (1990) 「el hecho de que 節について」, *イスパニカ* 34, 日本イスパニヤ学会。

___ (1993) 「de ahí que 構文について」, *神戸外大論叢* 44-6。